

〔条里地割と沖遺跡〕

これまでの沖遺跡の調査で、条里地割の施工開始は、鎌倉時代（14世紀前半）以前であることがわかりました。この条里地割の溝は、その後複数回にわたって掘り直され、江戸時代前期まで維持されています。現在の調査地横を流れる用水路も、江戸時代前期の溝（裏面図の黄色の溝）と全く同じ方向へと流れています。600年以上前の鎌倉時代以前に施工された土地区画が、現在まで残され、日常の土地利用にまで影響を与え続けている事がわかってきました。

また、条里地割施工以前は、調査地には弥生時代後期以前から川が流れ、古墳時代前期頃には溝が掘削されていたことがわかりました。この川・溝の中からは、弥生土器の破片や古墳時代の土師器が出土しており、弥生時代後期から古墳時代前期頃には、調査地周辺で人々の生活が営まれていたことが推測できます。

調査地の北側には、現在大東川が流れています。この大東川は、法勲寺の範囲を避けるように地形の傾斜方向（北東方向へ緩やかに傾斜）と逆方向に流れており、この区間は「逆さま川」とも呼ばれています。また、沖遺跡の付近では、条里地割の地境ラインを通るように、直線的に東へと流れていきます。このような状況は、自然の河川の流れは不自然であり、条里地割施工後のいずれかのタイミングで人為的に付け替えられた可能性も想定できます。今回の沖遺跡の調査で明らかになった鎌倉時代以前の溝と古代以前の河川の関係は、これらの大東川の整備と条里地割の施工の関係を解明するための手がかりとなるかもしれません。



周辺の条里地割（赤線）と沖遺跡・名遺跡（丸亀市都市計画図 1/2500 の一部を改変して使用）

〔今後の沖遺跡の発掘調査〕

調査が進むにつれて、この地点の弥生時代以降の土地利用の歴史が、少しずつ明らかになってきました。今年度の沖遺跡の調査は、9月末まで続く予定です。今後は、今回公開した調査区（3区）の北側・東側を調査する計画です。

今後の調査の進展については、埋蔵文化財センターのホームページで随時公開していく予定です。

〔はじめに 一沖遺跡の発掘調査一〕

香川県埋蔵文化財センターでは、国道438号建設工事に伴い、平成31年4月から令和元年9月までの期間で、丸亀市飯山町上法軍寺に所在する沖遺跡（おきいせき）の発掘調査を行っています。

今回の調査では、弥生時代後期から江戸時代前期までの遺構・遺物が見つかり、溝状遺構や多数の柱穴跡、土師器（はじき）や陶磁器が出土しました。特に、鎌倉時代から江戸時代前期にかけての溝状遺構は、「条里地割（じょうりちわり）」と呼ばれる古代から中世にかけて施工されたと推定される区画整理の名残（なごり）に平行する方向に延びており、これに関連する遺構と考えられます。

〔周辺の遺跡について〕

沖遺跡は、丸亀平野の東部に位置し、周辺には名遺跡（みょういせき）（弥生時代から古代の集落跡・水田跡）や岸の上遺跡（古墳時代後期から古代の集落跡・建物跡群）、法勲寺（ほうくんじ）（古代の寺院跡）など、様々な時代の遺跡が存在しています。

また、周辺の現在の地図をみても、道路や田んぼの区画が1辺約109m四方の基盤の目状に区分されていることがわかり、古代以来の「条里地割」の痕跡を読み取ることができます。

特に、平成29年度から平成30年度にかけて行われた名遺跡の調査では、弥生時代から古代にかけての水田跡や古墳時代後期の竪穴建物跡とともに、「条里地割」に平行する方向の溝状遺構が見つかりました。これらの溝状遺構は、平安時代の終わりごろから鎌倉時代にかけて掘削されたものと考えられます。今回の沖遺跡の調査でも、同一方向の溝状遺構が見つかり、この地域での条里施工の時期とその後の土地利用の変遷を解明する手がかりが得られてきました。



沖遺跡および周辺遺跡の位置（国土地理院 1/25000 地形図の一部を改変して使用）

〔条里方向の溝状遺構〕

調査区の東側と南側では、条里地割の方向に平行して、複数条の溝状遺構が掘られています。これらの溝状遺構は一部が重複しており、これらが時期差をもって掘られたこと、長期間にわたって何度も掘り直され、土地区画が維持されたことがわかります。このうち最も古い時期に掘削された溝状遺構からは、14世紀前半頃の土師質土器が出土し、少なくとも鎌倉時代の終わり頃までには、条里地割が施工されたようです。



↑ 東西方向の溝状遺構（青・緑・黄色）

〔自然流路と条里〕

条里方向にのびる溝状遺構の下からは、黒色粘土が堆積した河川（自然流路）跡が見つかりました。河川跡の中からは弥生時代後期から奈良・平安時代にかけての土器片や木製品が出土しています。

鎌倉時代頃に条里地割が施行される以前には、この地点には河川が流れ、周辺は河川に面した低地であったことがわかりました。

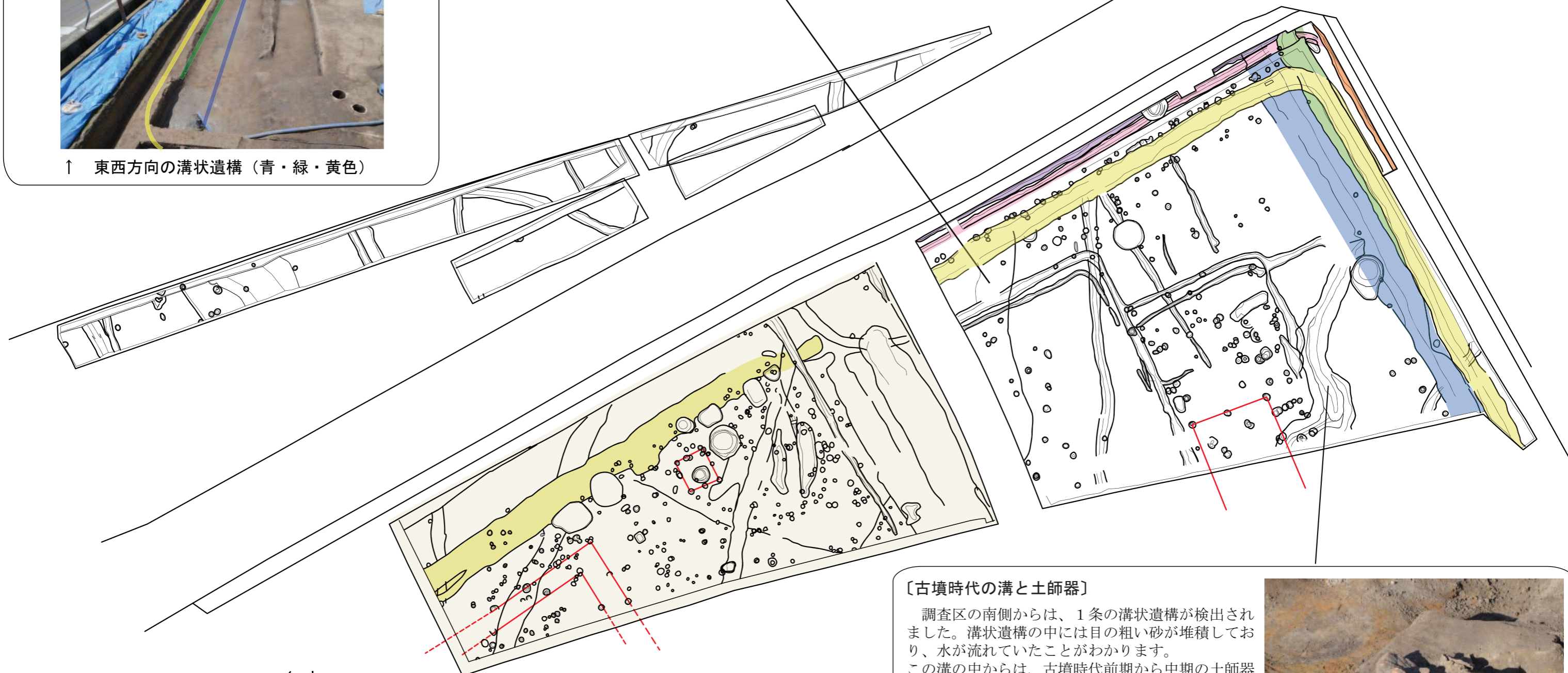
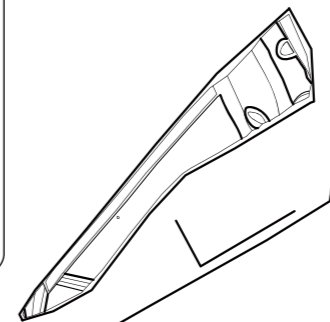


↑ 条里地割施工以前の河川

〔室町～江戸時代の建物〕

調査区内からは、多数の柱穴が見つっています。このうちのいくつかは、同じような深さ、大きさで等間隔に並んでおり、掘立柱建物跡（地面に穴を掘って柱を立てた建物）が建っていたことがわかりました（赤線部分）。いずれも出土遺物から、おおよそ室町時代から江戸時代にかけての建物と考えられます。

現在は水田となっていますが、400年ほど前までは建物が建てられ、人々が暮らしていたようです。



〔古墳時代の溝と土師器〕

調査区の南側からは、1条の溝状遺構が検出されました。溝状遺構の中には目の粗い砂が堆積しており、水が流れていたことがわかります。この溝の中からは、古墳時代前期から中期の土師器が、ほとんど欠けていない綺麗な状態で出土しました。水に流されて堆積したような摩滅した状態ではなく、付近から捨てられたと考えられます。

竪穴建物跡などの居住痕跡は見つかりませんが、この付近で古墳時代の人々の生活が営まれていたようです。



↑ 溝の中から出土した土師器

今回の公開範囲

0 10m
(1/200)